干潟東畑遺跡

－福岡県小郡市干潟所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第258集

2011

小郡市教育委員会

干潟東畑遺跡

－福岡県小郡市干潟所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第258集

2011

小郡市教育委員会

<序　文>

本書は、小郡市干潟において計画されました「立石・下鶴 4080 号線道路改良工事」に先立ち、小郡市教育委員会が実施しました干潟東畑遺跡の発掘調査の記録です。

調査地は、小郡市のほぼ中央を南北に貫流する宝満川の東側、小郡市干潟地内に所在します。遺跡からは、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物など生活の痕跡が発見され、当時の土地利用の様子が窺えました。

このように埋蔵文化財は、地域の歴史を明らかにする上で欠かす事の出来ない貴重な文化遺産です。本書が文化財に対するご理解、更には教育及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後に、地権者の重松ヨシエさん、さらには調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 23 年 3 月 31 日

小郡市教育委員会
教育長　清武 輝

<例　言>

1. 本書は、小郡市干潟地内における「立石・下鶴 4080 号線道路改良工事」に伴い、小郡市教育委員会が発掘調査を行った干潟東畑遺跡の報告書である。
2. 調査期間は、平成 21 年 12 月 1 日から平成 22 年 1 月 29 日まで実施した。
3. 調査面積は、630 ㎡である。
4. 本調査は、坂井貴志が行った。
5. 遺構の個別実測は坂井が行い、遺構全体図の作成及びデジタルトレースは、㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
6. 遺構の個別写真撮影は坂井が行い、遺跡全景写真は（有）空中写真企画に委託した。遺物写真の撮影は㈲文化財写真工房・岡紀久雄氏に委託した。
7. 遺物の復元・実測・製図には、担当者の他、白木千里、柳美保幸、衛藤知嘉子、佐々木智子、原野照子、井上千代美、永倉さゆみ、長野智恵子ら諸氏の多大なる協力を得た。
8. 本書に記載した遺構略号は、C：竪穴住居跡、B：掘立柱建物、K：土坑、P：ピットである。
9. 遺構実測図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
10. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
11. 本書の執筆・編集は、坂井が行った。

＜本文目次＞

第１章　調査の経過と組織 ……1
第２章　位置と環境 ……1
第３章　調査の内容
　　1　調査の概要 ……5
　　2　遺構と遺物
　　(1) 竪穴住居跡 ……5
　　(2) 掘立柱建物 ……6
　　(3) 土坑 ……9
　　(4) ピット ……17
第４章　調査の成果 ……19

＜挿図・表目次＞

第１図　干潟東畑遺跡 周辺遺跡分布図（S ＝ 1/25,000） ……2
第２図　干潟東畑遺跡 調査区位置図（S=1/2,500） ……2
第３図　干潟東畑遺跡 遺構配置図（S=1/200） ……3
第４図　１号竪穴住居跡実測図（S=1/40） ……6
第５図　２号竪穴住居跡実測図（S=1/40） ……7
第６図　竪穴住居跡出土遺物実測図（S ＝ 1/4） ……7
第７図　１号掘立柱建物実測図（S=1/40） ……8
第８図　２号掘立柱建物実測図（S=1/40） ……9
第９図　1・2・3・5 号土坑実測図（S=1/40） ……10
第 10 図　4・6・7 号土坑実測図（S=1/40） ……12
第 11 図　8・9・10 号土坑実測図（S=1/40） ……13
第 12 図　11 号土坑実測図（S=1/40） ……14
第 13 図　1・2・5 ～ 7・9・11 号土坑出土遺物実測図（S=1/4） ……15
第 14 図　13 号土坑実測図（S=1/40） ……16
第 15 図　13 号土坑出土土器実測図（S=1/4） ……17
第 16 図　ピット出土遺物実測図（S=1/4） ……18
第１表　出土遺物観察表 ……20

＜図版目次＞

図版１　調査区より東を望む、干潟東畑遺跡調査区全景
図版２　1 号住居土層・貼床検出・完掘、2 号住居完掘、1・2 号掘立柱建物全景、1 号土坑土層・完掘
図版３　2 号土坑土層・完掘、3 号土坑土層、4・6 号土層・完掘
図版４　7 ～ 10 号土坑土層・完掘、11・13 号土坑土層
図版５　竪穴住居跡・土坑出土土器
図版６　土坑・ピット出土土器

第１章　調査の経過と組織

干潟東畑遺跡の調査は、「立石・下鶴 4080 号線」道路改良工事に先立ち平成 18 年 12 月 12 日付で小郡市役所都市建設部道路建設課より同市教育委員会に対して埋蔵文化財の照会があったことを端緒とする（審査番号 6072）。これを受けて、平成 20 年 11 月 25 日に試掘調査を行った結果、現地表面下部 30 ～ 50㎝にて遺構が確認された。教育委員会は、都市建設部道路建設課へ本調査が必要であると回答し、協議の上平成 22 年 12 月 2 日より発掘調査を開始することとなった。

調査費用に関しては、道路建設課より教育委員会文化財課が予算の執行委任を受けて、調査を行った。

調査体制は以下の通りである。

［道路建設関係］

＜小郡市都市建設部＞

部　　長　池田　清巳
道路建設課　課　　長　佐藤　吉生
道路建設係　係　　長　松井　秀章
山口　浩一

［発掘調査関係］

＜小郡市教育委員会＞

教 育 長　清武　輝
教育部長　高木　良郎（平成 21 年度）
河原　寿一郎（平成 22 年度）
文化財課　課　　長　田篭　千代太
係　　長　片岡　宏二
嘱託技師　坂井　貴志

＜発掘作業従事者＞

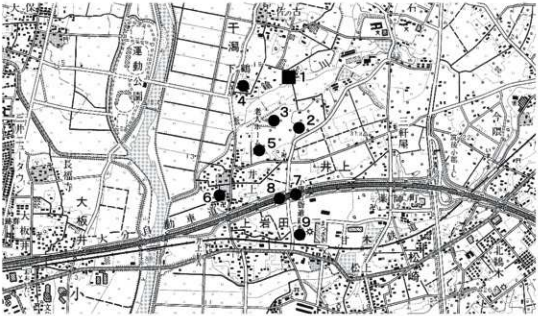
横田　雅江、草場　誠子、土井　久江、松本 スマ子、野田 美根子、荒巻　国利、野田　博文

第２章　位置と環境

小郡市を大きく分けると、市中央部を南流する宝満川流域の平坦地、西北部の通称三国丘陵と呼ばれる低丘陵地、そして今回調査した遺跡が位置する北東部の台地に分けられる。北東部には花立山があり、広大な裾野は洪積層から成る標高 20 m程の台地である。**干潟東畑遺跡**は、その台地上、宝満川の支流である鎗巻川によって開析された段丘崖沿いに立地する。

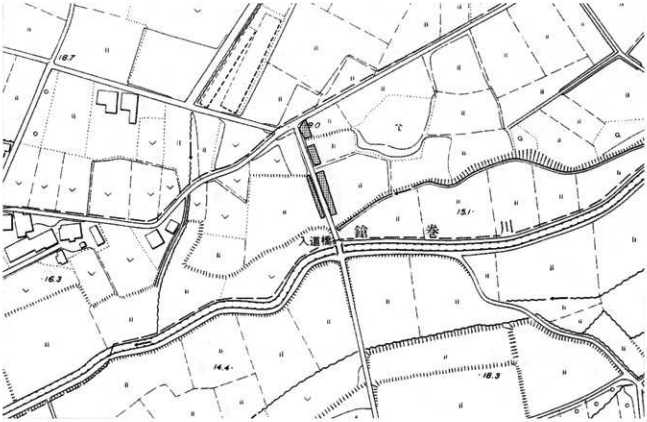
周辺には、**井上北内原、南内原１・２・３（５）、井上小松山１・２（２）同３・４（３）**等の遺跡が存在している。**井上北内原遺跡**は、弥生時代と古代の複合遺跡で、中心は弥生時代の住居跡・甕棺墓・祭祀土坑等である。古代の遺構としては、古墳時代後期の住居跡９軒等が確認された。**井上小松山遺跡**は、現在までに４次の調査が行われている。第１・２次調査では落し穴状遺構等が検出され、第３・４次調査では弥生時代中期の竪穴住居・祭祀土坑、古墳時代前期の住居跡や同後期の掘立柱建物等が確認された。また、当遺跡より西に約 300 mの地点には、大正時代に発見・調査された古墳時代前期の**下鶴古墳（４）**が位置する。

この地域の歴史を語る上で欠かすことが出来ないのが、当遺跡より南に１㎞程に位置する**上岩田遺跡（９）**の存在である。瓦葺き建物を戴く基壇状遺構、御原郡評と推定される官衙的様相を持つ大型掘立柱建物群、道路状遺構等が検出された。時期は７世紀後半以降が中心となる。また、その北西には８世紀代の古代寺院**井上廃寺（６）**が存在する。なお、上岩田遺跡の北側に隣接した本来同一の遺跡である**薬師堂東遺跡（７）・井上薬師堂遺跡（８）**等も存在し、これらの遺跡を営んだ集団が７・８世紀における当地域の中心勢力となることは言うまでもない。その中で今回確認された集落跡の調査意義は大きく、地域の発展の過程を考える上で重要な成果となろう。



1．千潟東畑　2．井上小松山1・2　3．井上小松山3・4　4．下鶴古墳
5．井上北内原、井上南内原1・2・3　6．井上廃寺　7．薬師堂東　8．井上薬師堂
9．上岩田

第1図　干潟東畑遺跡周辺遺跡分布図（S＝1／25,000）



第2図　干潟東畑遺跡調査区位置図（S＝1／2,500）

第３図　干潟東畑遺跡全体図（Ｓ＝1／200）

第３章　調査区の内容

１　　調査の概要

干潟東畑遺跡の総調査面積は 630 ㎡である。耕作地であることと、その耕作地造成のために大幅に削平を受けており、遺構の残存状況は良好とは言えない。
調査地は、南に流れる宝満川支流の鎗巻川に向かう段丘の斜面上に位置する。
調査区は、南よりⅠ区～Ⅳ区と設定した。遺構検出面は、北部のⅣ区から南部のⅠ・Ⅱ区にかけて緩やかに傾斜する（18.70 → 16.30m）。遺構は、地山面で検出し、基本層序は耕作土、暗灰色の造成土、遺物を多量に含んだ淡黒色土（包含層）、茶褐色土または暗茶褐色土の地山となる。
検出した遺構は、竪穴住居跡２軒、掘立柱建物跡２棟、土坑 12 基、ピット多数である。
遺物は、土師器が大半を占めており、須恵器は数点出土した。

２　　遺構と遺物

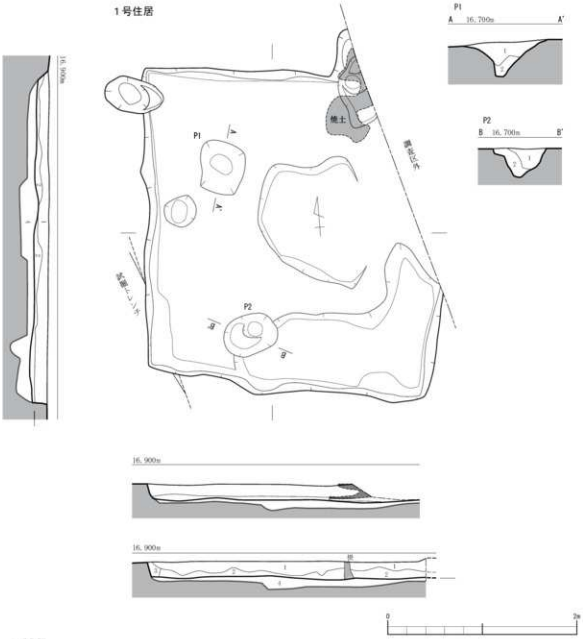
（１）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第４図、図版２）

１号住居跡は、Ⅰ区北側にて検出した。北東隅が調査区外に掛かるが、3.1 m× 3.0 mの正方形を呈する。若干の削平を受けており、床面までの深さは、約 19cm と浅い。その下に黄褐色土ブロック混じりの淡黒褐色粘質土で、4 ～ 10cm の貼床が施され略水平に仕上げている。遺構内には数基のピットが検出されたが、どれが主柱穴となりうるかは不明である。
北東隅において住居壁体から外側へ約 50cm 突出しており、また床面においても焼土の広がりが確認できたことからカマドの残骸であると思われる。また、南東隅付近はよく掘り込まれる。
出土遺物（第６図、図版５）
出土土器量は非常に少ない。
１は、カマド周辺の床面上から出土した土師器坏である。精製品で器高 2.5cm を測る。内外面は回転ナデ、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。橙色を呈し、口唇部がやや内傾する。

２号竪穴住居跡（第５図、図版２）

２号住居跡は、Ⅱ区北側にて検出した。北東・南西隅が調査区外に掛かるが、一辺が 3.0 m程の正方形を呈するものと思われる。貼床面を超えて大きく削平されているため、下層掘り込みのみの検出となった。
北壁中央においては、住居壁体より約 40cm 突出しており、焼土の広がりが若干ながら確認された。カマドの残骸であろうと思われる。
また、１号住居跡とは軸を同じくしており、企画性が窺えるものである。
出土遺物（第６図、図版５）
出土土器量は少ない。
２は、土師器甕口縁～胴部にかけての破片である。復元口径 29.1cm を測り、大型のものである。外面ハケメ、口縁部内外面はヨコナデを施し、内面頸部以下はヘラケズリで調整し明瞭な稜ができている。また、内面はススが付着する。

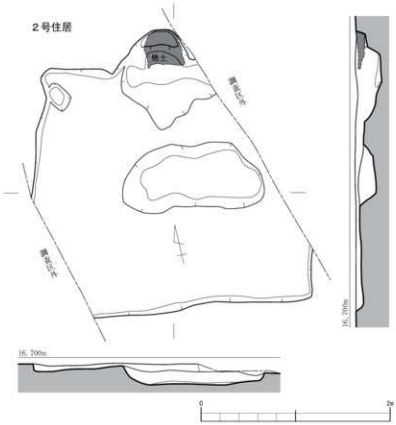


第４図　１号竪穴住居跡実測図（S＝1/40）

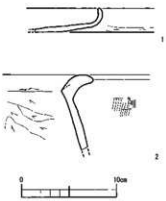
（２）掘立柱建物

今回の調査では、Ⅳ区において２棟分の掘立柱建物を確認した。いずれも南北方向棟で、南のⅠ・Ⅱ区において検出した住居方向と同様であるため密接に関連するものと思われる。

各柱穴からの遺物は極めて少なく、時期の決定に至るものはない。また、他遺構との切り合い関係も見られない。



第５図　２号竪穴住居跡実測図(S=1/40)



第６図　竪穴住居跡出土土器実測図
(S=1/4)

１号掘立柱建物（第７図、図版２）

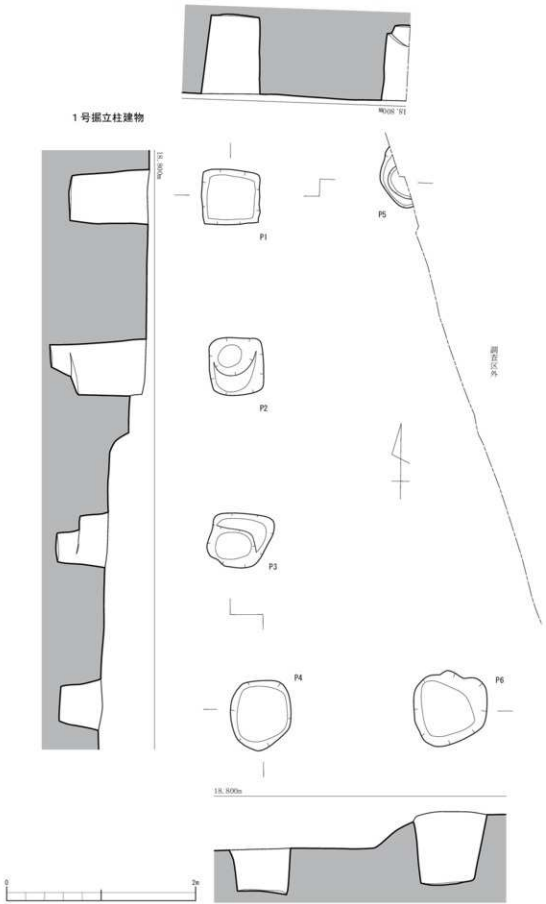
１号掘立柱建物は、Ⅳ区にて検出された南北３間（約5.5ｍ）、東西１間（約2.0ｍ）以上の側柱建物で、東西側は調査区外へと延びる。主軸はP4がややずれるが、ほぼ真北のＮ－1°－Ｗである。柱掘方は方形～略方形で、一辺58～76cmを測る。Ｐ3･4においては大きく削平を受けているため、現況の深さは31～45cmを測り、本来の深さは不明である。その他は検出面から76～103cmとかなり深い。柱痕や抜き取り痕は確認できておらず、埋土はいずれの柱穴も黄橙色粘質土ブロック混じりの淡黒色砂質土である。

遺物は、Ｐ１より、須恵器甕胴部片の出土があったが、細片のため図化するには至らなかった。

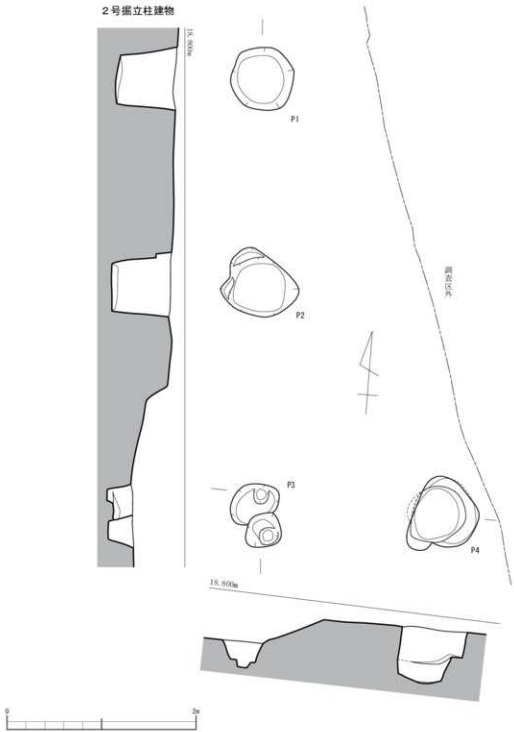
２号掘立柱建物（第８図、図版２）

２号掘立柱建物は、Ⅳ区にて検出された南北２間(約4.4ｍ)、東西１間(1.9ｍ)以上の側柱建物で、東西側は調査区外へと延びる。主軸はＮ－4°－Ｗである。先述した１号掘立柱建物とほぼ重なるように検出されたが、切り合いは確認できず先行関係は不明である。建て直しの可能性もあろう。柱掘方は円形～不整円形で、径60～75cmを測る。Ｐ３は削平を受けるため本来の深さは不明であるが、他は検出面より59～64cmを測る。柱痕や抜き取り痕は確認できておらず、埋土はいずれも黄橙色粘質土ブロック混じりの淡黒色砂質土である。

いずれの柱穴からも遺物の出土はない。



第７図　１号掘立柱建物実測図(S=1/40)



第８図　２号掘立柱建物実測図（S=1/40）

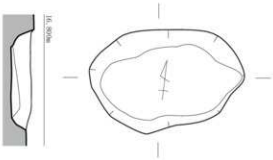
（３）土坑

１号土坑（第９図、図版２）

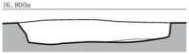
１号土坑は、Ⅰ区中央部に位置する。長軸 1.64m、短軸 1.07 m の東西に長い楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは、16cm 程度と浅い。

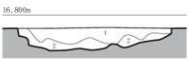
出土遺物（第 13 図）

１は、土師器坏である。復元口径 19.8cm を測る精製品で、内外面は回転ナデ、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。また、底部外面にはススが付着する。２は、土師器椀である。橙褐色を呈し、復元口径 17.6cm を測る精製品である。

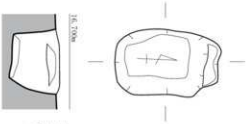


1号土坑

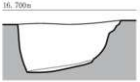


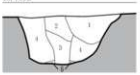


1号土坑
1 淡黒色土(ゆるく、土器片含む)
2 1層＋淡黄白色砂質土(地山、ザラザラとする)



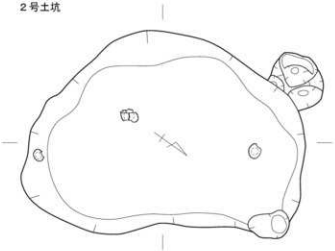
3号土坑

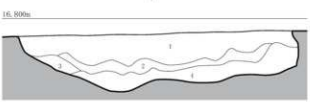




3号土坑
1 灰黒色土(ややしまりあり、茶褐色粘質土ブロック含む、炭・土器片含む)
2 淡黒色土(ゆるい、炭・土器片中量含む)
3 淡黒色土(ゆるい、黄茶色粘質土ブロック混じる)
4 淡黒色土(黄白色、茶褐色、黒色粘質土ブロック混じる。粘性強い)
5 地山＋4層

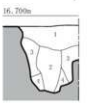
2号土坑





2号土坑
1 淡黒色土(ややしまりあり、土器片多量に含む)
2 淡茶色土(炭質、白色粒子、小礫含む)
3 淡褐色土(しまる、地山やや含む)
4 1層に似るが、地山多く混じる。土器片少量)

5号土坑



5号土坑
1 黒色土(黄橙色土ブロック少量混じる、土器片多量に含む)
2 淡黒色土(φ～1cm内小石、土器片少量含む)
3 淡黒色土(明色粒、黄橙色土ブロック多く含む)
4 灰黒色土(灰白色砂質＝地山質多く含む)

第９図　1・2・3・5号土坑実測図（S=1/40）

２号土坑（第９図、図版３）

２号土坑は、Ⅰ区中央部、１号土坑の西隣に位置する。長軸 2.92m、短軸 2.0m の南北に長い不整楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは約 55cm を測る。上層から下層まで多量の土器が出土し、廃棄土坑かと思われるが、土層観察では掘り込み等の確認は出来なかった。

出土遺物（第 13 図、図版５）

３は、土師器甕口縁～胴部にかけての破片である。復元口径 21.0cm を測る。４は、土師器甕口縁部である。５～９は土師器坏である。いずれも完形品で、口径は 12.5 ～ 13.6cm を測る。６については口縁部内外に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものであることがわかる。10 は土師器椀である。11・12 は須恵器坏蓋である。11 は復元口径 17.2cm、12 は 14.2cm を測る。いずれも内外回転ナデ、外面天井部はケズリ後ナデ調整される。

３号土坑（第９図、図版３）

３号土坑は、Ⅰ区南部に位置する。長軸 1.08m、短軸 0.68m の南北に長い隅丸長方形を呈する。検出面から底面までの深さは、48cm を測る。
土師器の出土はあったが、細片のみのため図化するに至らなかった。

４号土坑（第 10 図、図版３）

４号土坑は、Ⅰ区南部、３号土坑の南側に位置する。長軸 1.25m、短軸 0.74m の南北に長い隅丸長方形を呈する。検出面から底面までの深さは、47cm を測る。
土師器の出土はあったが、細片のみのため図化するに至らなかった。

５号土坑（第３・９図）

５号土坑は、Ⅰ区中央部東壁沿いに検出した土坑である。ピットが幾つか連接するような形状を呈しているが、土坑として扱う。深さは 20 ～ 88cm を測る。

出土遺物（第 13 図、図版５）

13 は、土師器甕口縁部である。復元口径 20.8cm を測る。14 は、土師器坏である。復元口径 14.1cm を測る。内外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデで調整される。15 は土師器皿である。内外面は回転ナデ、底部外面は、回転ヘラケズリを施す。また、内面には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものであることがわかる。

６号土坑（第 10 図、図版３）

６号土坑は、Ⅰ区南端に位置する。検出時土坑としていたものであるが、溝状の遺構が連接するものであろうか。西に隣接するⅡ区へと延伸し、10 号土坑と連結するものと思われる。

出土遺物（第 13 図、図版５）

16 は土師器甕口縁～胴部の破片である。

17 は土師器坏である。復元口径 12.8cm を測る精製品である。内外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後軽いナデで調整する。18 は土師器皿である。内外面回転ナデ、底部外面はヘラ切り後未調整である。19 は、土師器椀高台部である。

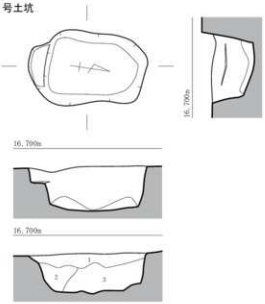
７号土坑（第 10 図、図版４）

７号土坑は、Ⅲ区南部に位置する。調査区に掛かるため詳細は不明であるが、径 0.8 m程の楕円径を呈すものと思われる。検出面から底面までの深さは、74cm を測るが、包含層である３層から掘り込まれており、本来の深さは 98cm を測るものである。

出土遺物（第 13 図）

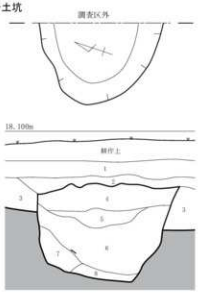
20 ～ 22 は土師器甕口縁～胴部である。復元口径は、20 が 24.2cm、21 は 28.8cm を測る。いずれも内面頸部以下は強いケズリのため稜ができる。また、22 は外面にススが付着する。

4号土坑



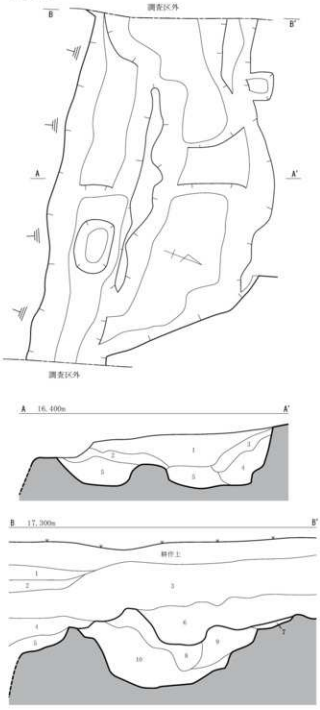
4号土坑
1 淡黒色土(ゆるい、黄褐色粘質土ブロック混じる、土器片・炭化物中量含む)
2 1層と似るが、黄白色砂質(地山)混じり、炭化物微量
3 淡黄褐色粘質土ブロック＋褐色粘質土ブロック＋黒色土

7号土坑



7号土坑
1 灰色土(砂質、よくしまる)
2 灰黒色土(ややしまる、砂粒・土器片多量に含む)
3 黒色土(ややしまる、砂粒・土器片多量に含む)
4 灰黒色土(白色粒子、土器片多量に含む)
5 淡灰褐色土(赤色土ブロック混じる、土器片多量に含む)
6 4層に似るが炭化物含む
7 4層に似るが黄茶色粘質土ブロック微量に含む
8 茶褐色粘質土＋黒色土

6号土坑

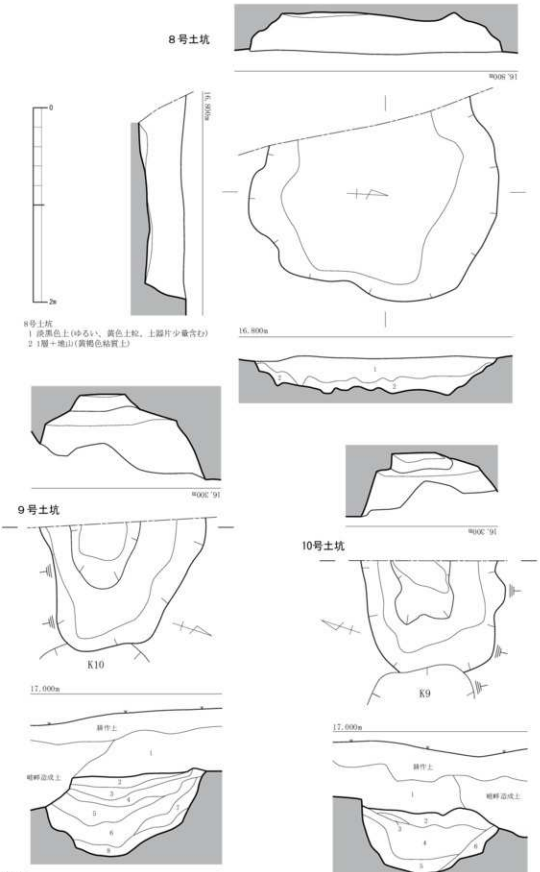


6号土坑

ベルト土層 (A-A')
1 淡黒色土(砂粒多く混じりややしまる、土器片多量に含む)
2 地山＋黒色土ブロック
3 1層＋黄褐色粘質土ブロック
4 淡黒色土(ややしまり、地山ブロック少量混じる、土器片含む)
5 黒色土(ややしまり、土器片含む)

西壁土層 (B-B')
1 灰色土(砂質、しまる)
2 淡灰色土(砂質、しまる)
3 灰黄褐色土(砂質、しまる、礫多く含む)
4 3層＋黄褐粘質土ブロック(井戸構設の埋土)
5 灰黒色砂質土(井戸構設の埋土)
6 淡黒色土(砂粒多く混じりややしまる、土器片多量に含む)
7 淡黒色土＋黄褐色粘質土ブロック
8 茶褐色土(ややゆ質混じる、茶褐色土粒粒多く含む)
9 淡黒色土(ややしまり、地山ブロック少量混じる、土器片含む)
10 黒色土(ややしまり、土器片含む)

第10図　4･6･7号土坑実測図(S=1/40)



第11図　8・9・10号土坑実測図（S=1/40）

8号土坑（第11図、図版4）

8号土坑は、Ⅱ区中部に位置する。調査区に掛かるため詳細は不明であるが、径2.5m程の不定円形を呈するものと思われる。検出面から底面までの深さは最大43cmを測り、底面は凹凸が著しい。廃棄土坑かと思われるが、土層観察においては掘り込み等の確認はできなかった。
土師器甕等の出土があったが、いずれも細片のため図化するに至らなかった。

9号土坑（第11図、図版4）

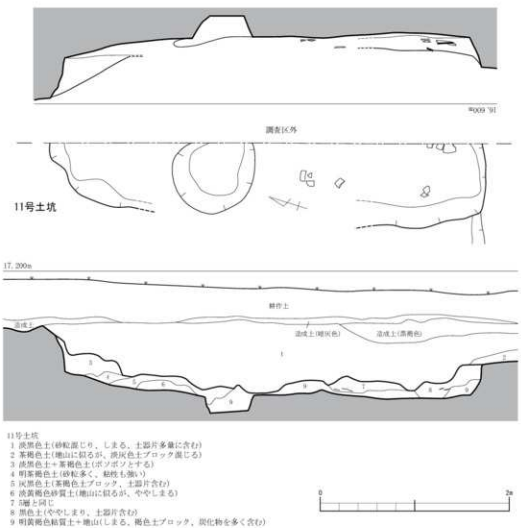
9号土坑は、Ⅱ区南端に位置し、10号土坑を切る。現況、(1.3) × 1.7mを測る。本来は楕円形を呈するものであろうか。深さは80cmを測る。

出土遺物（第13図）

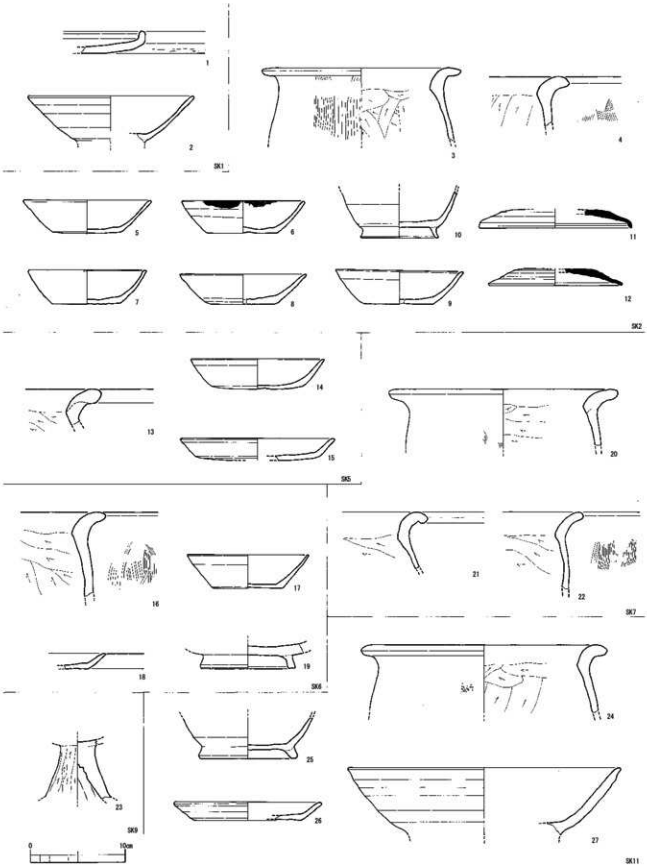
23は、土師器高坏脚部である。精製品で、外面は縦方向のヘラケズリを行い、内面は丁寧なナデを施す。不明瞭ではあるが、内面にはシボリ痕が残る。

10号土坑（第11図、図版4）

10号土坑は、Ⅱ区南端に位置し、9号土坑に切られる。現況1.14 × 1.3mを測る。道路を挟んだ東側のⅠ区南端の6号土坑と接続して、溝状を呈する可能性もあるが詳細は不明である。
土師器片の出土があったが、細片のため図化するに至らなかった。



第12図　11号土坑実測図 (S=1/40)



第13図　1･2･5～7･9･11号土坑出土土器実測図（S=1/4）

11 号土坑（第 12 図、図版 4）

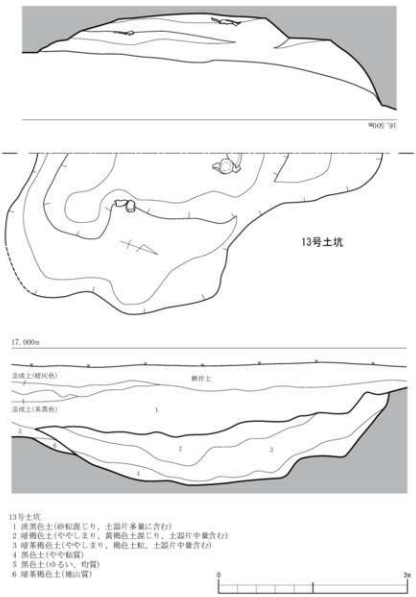
11 号土坑は、Ⅱ区南部に位置する。13 号土壙と切り合う。検出段階において遺構上部には包含層が被っている状態であった。そのため、重機による包含層の掘削を行い、切り合いの判別を行った。土坑内最下層（第 9 層）には大量の炭化材が含まれており別遺構からの廃棄土であることが想定できる。

出土遺物（第 13 図、図版 5）

24 は土師器甕口縁部である。復元口径 26.0cm を測る。内面頸部以下はケズリを行い明瞭な稜ができている。25 は土師器椀である。口縁部は欠損する。26 は土師器皿である。内外面回転ナデで調整、底部はヘラ切り後未調整のままである。27 は復元口径 28.9cm を測る。高台は欠損する。大型の坏とすると余にも口径が大きく、また皿だとすると余にも体部が深い。管見では類例を見ない。

13 号土坑（第 14 図、図版 4）

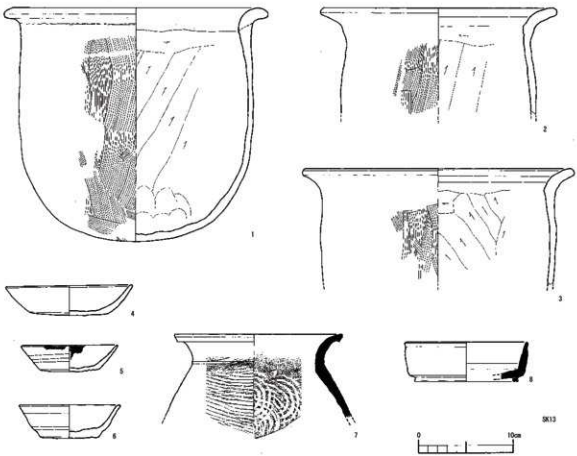
13 号土坑は、Ⅱ区南部、11 号土坑に隣接する。包含層が厚く被っており、重機によって剥ぎ取ってから切り合いの判別を行った。調査区に掛かるため全容は不明であるが、現況 1.6 × 3.64 mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは 99cm を測る。



第 14 図　13 号土坑実測図（S=1/40）

出土遺物（第15図、図版6）

1～3は土師器甕である。1は、口径27.8cmを測る。2は復元口径25.0cm、3は28.8cmを測る。いずれも、内面頸部以下は強いケズリのため明瞭な稜ができている。4～6は土師器坏である。口径10.2～13.4cmを測る。いずれも内外回転ナデ、底部外面はヘラ切りで調整される。5には口縁部に油煙の付着が見られ、灯明皿として使用されたことがわかる。7は須恵器甕口縁部である。復元口径16.8cmを測る。内面は青海波当て具痕、外面は平行タタキによる。8は須恵器坏である。復元口径13.1cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、底部との境が明瞭である。高台も低く、端部よりも内側に付く。



第15図　13号土坑出土土器実測図（S=1/4）

（4）ピット【SP】

本調査では多数のピットを検出したが、1・2号掘立柱建物の他に建物跡となるようなものは確認できなかった。また遺物の出土も少なく、本項では遺物の出土のあったSP－29・30・33・41の4基について規模等の資料提示を行うものとする。

SP－29（第3図）

SP－29は、Ⅱ区東壁沿いにて検出した。調査区外に掛かるため詳細は不明であるが、径36cm程の円形を呈するものと思われる。底面は、平坦である。検出面からの深さは58cmを測る。

出土遺物（第16図、図版6）

1は、須恵器皿である。復元口径15.6cm、器高1.7cmを測る。内外面とも回転ナデを施し、底部外面は糸切り後軽いナデで調整する。生焼け品で、灰黄白色を呈する。

ＳＰ－30（第３図）

ＳＰ－30は、Ⅱ区東壁沿い、ＳＰ－29の西隣に位置する。長軸34cm、短軸24cm、深さ45cmを測り、楕円形を呈する。底面は平坦である。

出土遺物（第16図、図版6）

2は、須恵器坏蓋である。復元口径13.5cm、器高1.45cmを測る。内面は回転ナデ、外面天井部は回転ヘラケズリを施す。また、内面天井部にはかなり磨滅しているが、墨が付着しており、硯として転用されていたことがわかる。

ＳＰ－33（第３図）

ＳＰ－33は、Ⅱ区東壁沿い、SP－の北60cm程に位置する。長軸50cm、短軸30cm、深さ59cmを測り、楕円形を呈する。上端から30cm程下にテラスを有する。底面は平坦である。

出土遺物（第16図）

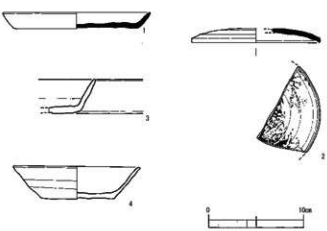
3は、土師器坏である。器高3.6cmを測る。内外面とも回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ調整を行う。

ＳＰ－41（第３図）

ＳＰ－41は、Ⅰ区南部、3･4号土坑の東に位置する。径28cm程の円形を呈するものと思われる。深さは47cmを測り、上端から30cm程下に三日月状のテラスを一段有する。

出土遺物（第16図、図版6）

4は土師器坏である。精製品で、口径13.5cm、器高3.5cm、底径7.7cmを測る。内外面とも回転ナデ、底部外面はヘラ切り後未調整のままである。



第16図　ピット出土土器実測図(S=1/4)

第４章　調査の成果

今回の調査では、竪穴住居跡２軒、掘立柱建物２棟、土坑 12 基、ピット多数が検出された。以下では、当遺跡を構成する各種遺構を概観しながら成果をまとめ、締めくくる事にしたい。

・竪穴住居　　２軒検出された竪穴住居は、小型で方形のプランを呈する。どちらも主軸方位はＮ－10°－Ｅを測る。主柱穴は確認できておらず、柱を持たないものと思われる。カマドは、住居壁体を外に掘り込んで構築するタイプで、設置位置はどちらも北壁である。主軸方位、カマド設置位置など、どちらも同様であり、所属集団内の方向規制が窺える。
出土遺物は、削平を受けているため量が少なく、また出土したものも破片のみのため時期決定が難しいが、８世紀中頃を上限と見てよいだろう。

・掘立柱建物　　建物は２軒検出された。いずれも主軸が現状南北をとるが、調査区外へと延びるため詳細は不明である。建物を構成する各柱穴からの出土遺物が少なく、また切りあう遺構も存在しないため時期の確定が困難である。はっきりと言えることは、やや南にて検出された竪穴住居跡と方位が近似するということである。

・土坑　　12 基の土坑が検出された。本調査区の北側を中心として集落域が広がると思われるが、集落域の直ぐ側ではなく、南側を中心に土坑・廃棄土坑が掘削されている様子が窺えた（第３図）。詳細は不明であるが、南側の段丘の落ち際箇所がそうした土坑・廃棄土坑の掘削場所として認識されていたのであろう。

土坑内から出土した土器の中には、第 13 図５～９の様に、９世紀に入るであろう遺物も多数見られた。本文中でも触れたが、北部のⅣ区以外には包含層がかなり厚く乗っており、最大で 50㎝を測る箇所もある。包含土中の遺物時期は９世紀を中心とするものである。そのため、各遺構の上層にて出土したものについては多分にその包含層中の遺物が含まれていると考える事ができよう。それ以外で見てみると、やはり８世紀中～後半頃のものが中心となるようである。

今回の調査は、幅の狭いトレンチ状の調査区ではあったが、８世紀中頃～後半にかけての集落の一部が確認できた。また、段丘崖沿いに位置する集落の土地利用の様子をも窺う事ができた。

当該時期の集落は周辺に、谷を挟んだ南部の丘陵上にある上岩田遺跡・薬師堂遺跡・薬師堂東遺跡、そして当地と同丘陵上の北東 2㎞に位置する干潟遺跡群が挙げられる。

今後、当集落の全体像をはじめ、周辺に広がる両大集落との具体的な関係を掴むことが重要であり、今後の調査が期待されるものである。

第1表　出土遺物観察表

出土遺構	掲図番号	図版番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
1号竪穴住居	6-1	5	土師	皿	－	－	2.5	内外:橙色	精良、φ～1mmの雲母砂礫かに含む	良好	内外:回転ナデ　底部外面:手持ちヘラケズリ	
2号竪穴住居	6-2	5	土師	甕	(29.1)	－	－	内:灰褐色　外:赤褐色	精良、φ～2mm砂粒含む	良好	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ　外:ハケメ	内面スス付着
1号土坑	13-1	－	土師	皿	(19.8)	－	1.3	内外:橙色	φ～3mm砂粒含む	良	内外:回転ナデ　底部外面:手持ちヘラケズリ	
	13-2	－	土師	椀	(17.6)	－	－	内外:橙色	精良	良好	内外:回転ナデ	
2号土坑	13-3	5	土師	甕	(21.0)	－	－	内外:赤橙色	φ～3mm砂粒中量含む	良	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ　外:ハケメ	
	13-4	－	土師	甕	(29.4)	－	－	内:淡褐色　外:黄褐色	φ～2mm砂粒含む	良	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ　外:ハケメ	
	13-5	5	土師	坏	13.6	－	3.5	内外:赤橙色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-6	5	土師	坏	13.0	7.4	3.4	内外:橙色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後ナデ	口縁油煙付着
	13-7	5	土師	坏	12.5	7.1	3.6	内外:橙～淡黒色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後未調整	
	13-8	5	土師	坏	13.4	7.8	3.1	内外:黄橙色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-9	5	土師	坏	13.5	7.6	3.5	内外:淡橙色	精良、φ～1mm砂礫含む	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-10	5	土師	坏	－	8.2	－	内外:橙色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ケズリ後ナデ	
	13-11	－	須	坏蓋	(17.2)	－	1.9	内外:暗灰色	精良	堅緻	内外:回転ナデ　天井部外面:ケズリ後ナデ	
	13-12	5	須	坏蓋	(14.2)	－	1.75	内外:暗灰色	精良	堅緻	内外:回転ナデ　天井部外面:ケズリ後ナデ	
5号土坑	13-13	－	土師	甕	(20.8)	－	－	内外:淡黄橙色	φ～2mm砂粒中量含む	良	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ	
	13-14	5	土師	坏	(14.1)	－	3.15	内外:橙色	精良	良	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-15	5	土師	皿	(16.4)	－	2.3	内外:赤橙色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:回転ヘラケズリ	内面油煙付着
6号土坑	13-16	－	土師	甕	－	－	－	内外:淡橙色	φ～7mm砂粒・雲含む	良	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ　外:ハケメ	外面スス付着
	13-17	5	土師	皿	(16.1)	－	1.6	内外:淡黄白色	精良	良	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り	
	13-18	－	土師	坏	(12.8)	(7.6)	3.5	内外:淡黄橙色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	13-19	－	土師	坏	－	10.0	－	内外:橙色	精良、φ～1mm砂礫含む	良好	内外:回転ナデ	
7号土坑	13-20	－	土師	甕	(24.2)	－	－	内:淡灰色　外:淡黄色	φ～3mm砂粒含む	良	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ　外:ハケメ	
	13-21	－	土師	甕	(28.8)	－	－	内外:淡橙色	φ～2mm砂粒含む	良好	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ	
	13-22	－	土師	甕	－	－	－	内外:黄橙色	φ～3mm砂粒含む	良	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ　外:ハケメ	外面スス付着
9号土坑	13-23	－	土師	高坏	－	－	(6.25)	内外:淡橙色	精良	良	内:ナデ、シボ?痕残る　外:ヘラケズリ	
11号土坑	13-24	5	土師	椀	(26.0)	－	－	内外:淡橙色	φ～3mm砂粒中量含む	良	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ　外:ハケ後ナデ	
	13-25	5	土師	椀	－	(10.1)	－	内外:橙色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後粗ハケナデ	
	13-26	5	土師	皿	(15.7)	(11.2)	1.9	内外:橙色	φ～1mm以下の雲母砂含む	良好	内外:回転ナデ　底部外面:回転ヘラきり	
	13-27	5	土師	鉢?	(28.9)	－	－	内外:黄橙色	精良、雲母礫かに含む	良	内外:回転ナデ	
13号土坑	15-1	6	土師	甕	27.8	－	24.6	内外:黄橙色	φ～2mm砂粒中量含む	良好	口内外:ヨコナデ　内:ケズリ、ユビオサエ　外:ハケ	
	15-2	－	土師	甕	(25.0)	－	－	内外:淡橙色	φ～2mm砂粒含む	良	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ　外:ハケ	
	15-3	－	土師	甕	(28.8)	－	－	内外:淡橙～黄橙色	φ～3mm砂粒中量含む	良好	口内外:ヨコナデ　内:ヘラケズリ　外:ハケ	
	15-4	6	土師	坏	13.4	－	3.1	内外:黄橙色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	15-5	6	土師	坏	10.2	－	2.7	内外:淡黄橙色	精良	良好	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り	口縁油煙付着
	15-6	－	土師	甕	(16.7)	－	3.5	内外:淡橙色	精良、φ～1mm砂礫含む	良	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後ナデ	
	15-7	6	須	甕	(16.8)	－	－	内外:灰色	精良	堅緻	口内:回転ナデ　口外:ヨコナデ　内:青海波当て具痕　外:平行タタキ	
	15-8	－	須	坏	(13.1)	(11.0)	4.15	内外:灰～暗灰色	精良	堅緻		
SP29	16-1	6	須	皿	(15.6)	(13.1)	1.7	内外:灰黄白色	精良	軟質	内外:回転ナデ　底部外面:ヘラ切り後ナデ	
SP30	16-2	6	須	坏蓋	(13.5)	－	1.45	内外:淡灰色	φ～2mm砂粒含む	やや軟質	内外:回転ナデ　天井部外面:回転ヘラケズリ	転用硯
SP33	16-3	－	土師	坏	－	－	3.6	内外:淡橙色	φ～1mm以下の雲母砂含む	良好	内外:回転ナデ　底部外面:回転ヘラ切り	
SP41	16-4	6	土師	坏	13.5	7.75	3.5	内外:淡橙色	精良、赤色粒子含む	良好	内外:回転ナデ　底部外面:回転ヘラ切り	

調査区より東を望む

干潟東畑遺跡調査区全景

図版2

1 号住居土層（東西）

2 号住居完掘

1 号住居土層（南北）

1・2 号掘立柱建物全景

1 号住居貼床検出状況

1 号土坑土層

1 号住居完掘

1 号土坑完掘

2号土坑土層

4号土坑完掘

2号土坑完掘

6号土坑土層(A-A')

3号土坑土層

6号土坑土層(B-B')

4号土坑土層

6号土坑完掘

図版4

7 号土坑

10 号土坑

8 号土坑土層

11 号土坑土層①

8 号土坑完掘

11 号土坑土層②

9 号土坑

13 号土坑土層

SC1
6-1

SC2
6-2

SC2
13-3

SC2
13-5

SC2
13-6

SC2
13-7

SC2
13-8

SC2
13-9

SC2
13-10

SC2
13-12

SC5
13-14

SC5
13-15

SC6
13-17

SC11
13-25

SC11
13-26

SC11
13-27

SC11
13-24

図版6

SC13
15-1

P29
16-1

SC13
15-4

P30
16-2

SC13
15-5

P41
16-4

SC13
15-7

	報　告　書　抄　録
ふりがな	ひかたひがしはたいせき
書名	干潟東畑遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第２５８集
編著者名	坂井　貴志
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在位置	〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5147-3　℡ 0942 － 75 － 7555
発行年月日	平成 23 年 3 月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
干潟東畑（ひかたひがしはた）遺跡（いせき）	福岡県（ふくおかけん）小郡市（おごおりし）干潟（ひかた）	40216		33°24′24″	129°04′56″	2009. 12. 2 ～ 2010. 2. 23	630 ㎡	道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
干潟東畑遺跡	集落	古代	竪穴住居跡 掘立柱建物 土坑 廃棄土坑 ピット群	土師器 須恵器	

干潟東畑遺跡は、小郡市を縦断する宝満川東岸、花立山西側に広がる低位段丘上の標高 17 m 前後に立地する。調査の結果、竪穴住居 2 軒、掘立柱建物 2 棟、土坑 12 基、ピット多数を検出した。時期は概ね 8 世紀中頃～後半にかけてである。当地周辺に広がる集落の一端として捉えることができ、地域の発展過程を考える上で不可欠な成果となった。

干潟東畑遺跡

小郡市文化財調査報告書第 258 集
平成 23 年 3 月 31 日
発行　小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 255-1
出版　片山印刷㈱
福岡県小郡市祇園 1-8-15